

「地の塩、世の光」

(マタイ5:13~16)

挽地茂男

2020.2.9 日本基督教団千歳丘教会礼拝

先週から「山上の説教」を読みはじめました。今日は最初に少し「山上の説教」の構造に触れておきたい



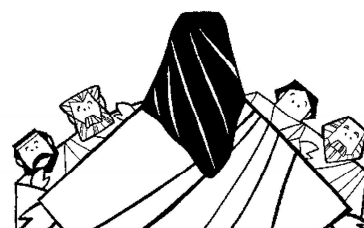
と思います。「山上の説教」を構成する特徴は「三」という数字です。三つで一つという「三つ組みのパターン」

ン」が頻繁に出てきます。まず「山上の説教」全体が、大きく三つの部分からできあがっています。一つは「宣言」(5:3-16)、二つは「教え」(5:17-7:12)、三つ目は「警告」(7:13-27)です。「山上の説教」全体が「宣言」「教え」「警告」の三部で構成されているのです。そしてさらに「宣言」「教え」「警告」のそれぞれが三つ組みで構成されているのです。最初の「宣言」(5:3-16)の下に「三つの宣言」が配置され、2番目の「教え」(5:17-7:12)の下にはさらに「三部の教え(三部からなる教え)」が置

図表1 山上の説教の構造

	マタイ福音書	並行記事
導入部 説教の状況設定	4:23-25/ 5:1-2	マコ 1:39、3:7-13 ルカ 6:12、17-20a
I. 三つの宣言——弟子たちを終末論的共同体として形成するために 5:3-16		
A 「幸い」の教え: 弟子の品性と運命	5:3-12	ルカ6:20b-23 (24-26)
B 「地の塩」である弟子	5:13	ルカ 14:34-35 マコ 9:49-50
C 「世の光」また「山の上の町」である弟子	5:14-16	ルカ 8:16、11:33 マコ 4:21
II. 三部からなる教え——終末論的共同体における生活様式について 5:17-7:12		
A 第一部「律法と預言者」(神の民の義) 5:17-48		
1 律法と預言者の完成/律法学者やファリサイ派の人々の義に「より優る義」	5:17-20	ルカ 16:16-17
2 「より優る義」を具体的に示す 三つの反対命題 (律法の根源化) 5:21-32		
a. 殺すな (怒り)	5:21-26	ルカ 12:57-59 マコ 11:25
b. 姦淫するな (色欲)	5:27-30	マコ 9:43
c. 離縁状を渡せ (姦通)	5:31-32	ルカ 16:18 マコ 10:3-4、11:12
3 弟子であるための三つの反対命題 5:33-48		
a. 偽りの誓いを立てるな (言葉の誠実)	5:33-37	M
b. 目には目を (復讐の放棄)	5:38-42	ルカ6:29-30
c. 隣人を愛し、敵を憎め (愛敵)	5:43-48	ルカ6:27-28、32-36
B 第二部「心からの敬虔」(神の民の敬虔) 神の御前で三つの義しい行為 6:1-18		
1 施し (名譽欲・見せびらかしを捨てて)	6:1-4	M
2 祈り (真の祈りを目指して) 6:5-15		
a. 偽善者や異邦人の祈り (見せる敬虔・饒舌)	6:5-8	M
b. 主の祈り (真の祈り)	6:9-13	ルカ 11:2-4
c. 赦し (赦す者は赦される)	6:14-15	マコ 11:25 (-26)
3 断食 (隠れたことを見ておられる父の前で)	6:16-18	M
C 第三部「慈しみの行為」(神の民の日常的行為) 社会的関係と行動において神を信頼し神に仕える ——真の義についての補足的な教え 6:19-7:12		
1 神に仕えるか富に仕えるか (神への誠実)	6:19-24	ルカ 12:33-34 11:34-36 16:13
2 思い煩うな 神への信頼——神の国を第一に求めよ	6:25-34	ルカ 12:22-32
3 人を裁くな (正しい自他の評価)	7:1-5	ルカ6:37-42 マコ 4:24-25
4 神聖なものを犬に与えるな (正しい価値観)	7:6	M
5 求めることと受けること (神への依存関係)	7:7-11	ルカ 11:9-13
6 結びの要約: 黄金律 (人にしてもらいたいと思うことを人にせよ) = これこそ律法と預言者	7:12	ルカ6:31
III. 三つの終末論的警告 7:13-27		
A 二つの道	7:13-14	ルカ 13:23-24
B 二種類の果実 (偽預言者)	7:15-23	ルカ6:43-46
C 二人の家造り	7:24-27	ルカ6:47-49
説教の結び	7:28-29	マコ 1:22

M. Eugene Boring, *The Gospel of Matthew*, NIB vol.viii, Nashville, TN: Abingdon Press, 1995, p.173.

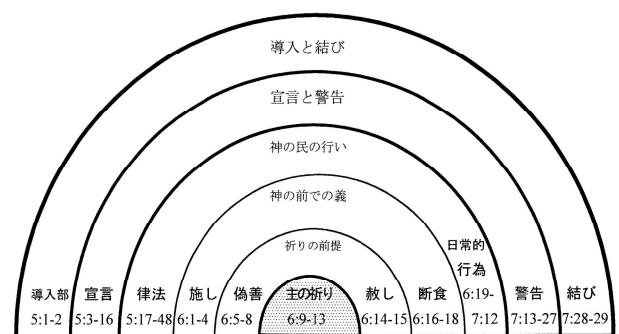


かれています。そして3番目の「警告」(7:13-27)の部分の下にも「三つの警告」が配置されます。「宣言」と「教え」と「警告」という「三つ組み」の下に、さらにそれぞれ「宣言」が「三つ組み」で、「教え」が「三つ組み」で、「警告」が「三つ組み」で構成されているのです。そしてさらに細部にも、この「三つ組み」のパターンが使われています。そして「宣言」「教え」「警告」で構成された「山上の説教」の前に短い「導入部」(5:1-2)が置かれ、「山上の説教」の後には短い「結び」(7:28-29)が配置されています。「山上の説教」は、極めて周到にかつ慎重に構成されているのです。福音書記者マタイはこの山上の説教の重要性を自覚しているのです。

説教の中心になる「教え」の部分は律法〔旧約聖書の掟(規則)〕を扱っています。しかも主イエスは「**だから、あなたがたの天の父が完全であられるように、あなたがたも完全な者となりなさい**」(5:48)と命じます。「神のように完全である」ことなどわたしたちにはできるはずがない。主イエスはわたしたちの無力さを暴露し、罪を

裁くためだけに、このような掟を語っておられるのでしょうか。キリスト者にとって律法(の規則)とは何か、律法はキリスト者の自由を台無しにして、「あれをしてはいけない」「これはしてはいけない」と、あいるは「あれをしろ」「これをしろ」と、キリスト者を再び規則づくめの奴隷状態(隷属)に導くのではないか。キリスト者は律法をどう理解し、どのように受け止めればよいのか。この問題は、マタイの時代に緊急性を帯びた教会の課題であったのです。

そしてそのことを理解しようとするときに、「山上の説教」の中心に、「主の祈り」があることを心にとどめてください。現代のマタイによる福音書の指導的研究者の一人がこういっています。「**山上の説教は、その中心(6:9-13〔主の祈り〕)において、行為する人間を神に祈るように導く。山上の説教の実践がその中心においては**



図表2 山上の説教の「囲い込み構造」

祈りであることを見落とす解釈は、マタイの意味では誤解である」

(L. ルツ 『EKK新約聖書註解I/1 (1-7章)』教文館、1990年、267頁)。

ではまず短い「地の塩」(v.13)に関する宣言から見てみましょう。

13節。「5:13 「あなたがたは地の塩である。だが、塩に塩気がなくなれば、その塩は何によって塩味が付けられよう。もはや、何の役にも立たず、外に投げ捨てられ、人々に踏みつけられるだけである。」「あなたがた」という代名詞



塩の結晶

(ἡμεῖς ヒュメイス) が特別につけられています。これは強調表現なのです。で

すから訳すとすれば、「あなたがたこそ地の塩である」となります。また「あなたがたこそ…」という複数表現は、この宣言が、弟子たちの共同体に向けて語られていることを示しています。弟子たちが現在の彼ら(地の塩)になったのは、彼らの固有の潜在能力に気づいて、それを開発したからではなく、主イエスご自身の言葉による

のです(4:18-22参照)。主イエスは「あなたがたは地の塩である」と語ります。主イエスは、「地の塩になりなさい」と、命じてはいません〔命令法〔命令文〕ではなく、直説法〔肯定文〕で表現されている〕。「あなたがたは地の塩です」と、断定しているのです。この箇所はわたしたちに何かの努力を要求しているのではないのです。わたしたちが塩であることを主イエスが宣言しているのです。ボンヘッファーという神学者は、「この直説法(肯定文)の中に、弟子たちの全実存、全生涯が主イエスの祝福の中にあることを明示している」(ボンヘッファー『キリストに従う』113)と語ります。

では塩の働き(マタイの伝統と文脈においては塩は多くの暗示的意味を持っている)とは何でしょうか。まず第1に、塩は①清める(純化する)ために用いられます。日本でもきよめのために塩を用いますが、その白く透明感ある結晶は、当時の純潔の象徴でした。預言者エリシャが塩を用いて行った奇跡が、旧約聖書の列王記下2章19-22節に出てきます。「2:19 この町の人々はエリシャのところ

に来て、『御覧のように、この町は住むには良いのですが、水が悪く、土地は不毛です』と訴えた。

2:20彼は、『新しい器を持って来て、それに塩を入れなさい』と命じた。人々が持って来ると、2:21



彼は水の源に出かけて行って塩を投げ込み、『主はこう言われる。「わたしはこの水を清

めた。もはやここから死も不毛も起こらない』』と言った。2:22 エリシャの告げた言葉のとおり、水は清くなって今日に至っている。

第2に塩の働きは、②腐敗を防ぐこと、「防腐剤」の役割をすることです。旧約時代でも、新約時代でも、当時は冷蔵庫も合成保存料ありませんでしたから、塩が肉や魚を腐敗から守る役割をしていたのです。それは、腐敗するつまり朽ちて行くいのちを守るものでした。少し大げさに言えば、死んで腐敗の一步を歩み出したものに、塩が、新たにいのちを授けるといいう言い方もできるでしょう。塩はいのちの象徴であったのです。

第3に塩は、当然、③味を付けるために使われます。代表的な「調

味料」のひとつです。塩味のない食事は、文字通り味気ないものです。塩は味の象徴であったのです。ヨブ記にこんな言葉があります。

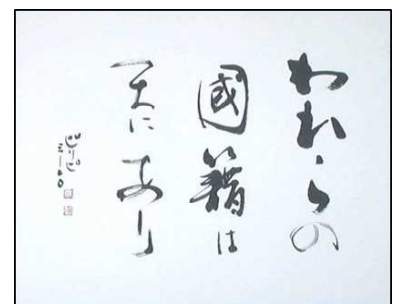
6章6節。「味のない物を塩もつけずに食べられようか。玉子の白身に味があろうか。」昔から玉子には塩と決まっていたのですね。

第4に塩は、④契約のしるしとして、祭壇に献げる献げ物にかけます。エゼキエル書43章24節。「エゼ 43:24 あなたは、それら(無傷の雄羊)を主の前にささげ、祭司たちはその上に塩をまき、焼き尽くす献げ物として主にささげる。」レビ記2章13節を見ると、この塩が「神との契約の塩」と呼ばれています。「2:13 穀物の献げ物にはすべて塩をかける。あなたの神との契約の塩を献げ物から絶やすな。献げ物にはすべて塩をかけてささげよ。」塩は神との契約的忠誠を象徴しているのです。また民数記18章19節を見ると、塩が人間同士の契約の象徴であることが分かります。「民18:19 イスラエルの人々が主にささげる聖なる献納物はすべて、あなたとあなたと共にいる息子たち、娘たちを与える。これは不変の定めである。

これは、主の御前にあって、あなたとあなたと共にいるあなたの子孫に対する永遠の塩の契約である。」塩は、献身と契約的忠誠を象徴し、共に食事をするのが「塩を分かち合う」と呼ばれており、拘束力のある関係を表現します。

キリスト者が「地の塩」と呼ばれるとき、どのような働きが期待されているのでしょうか。「地」はここでは、「世界」や「この世」をさしています。マタイは「世界」という言葉を9回使っていますが、マタイにとって世界は、(1)サタンに属しているのではなく、神の創造物であること(13:35、24:21)。(2)また世界は、弟子たちの任務が果たされる場所でもあります(5:14、13:38、26:13)。そして(3)世界は、神の御心が最終的に行われる場所でなのです(6:10)。塩はそれ自体のために存在しているではありません。弟子たちもそうなのです。彼らの生涯は外の世界へと向けられています。キリスト者の生涯もそうです。この地この世界に塩は溶けて浸透していくのです。そして浸透した「地の塩」は、世界の腐敗を防ぐのです。世界を破滅から防ぐ

のです。紀元2世紀の前半に書かれた「ディオグネトスへの手紙」(5-6章)はこのテーマを発展させ雄弁に語っています(IB,289, 荒井献編『使徒教父文書』佐竹明訳、講談社文芸文庫, 267f.)。少し長いので、途中端折りながらお読みします。「5:4 彼ら(キリスト者)は……5:8 地上にとどまっているが、天に市民権を持っている。5:10 定められた法律に従うが、自分の生活では法律に打ち勝っている。5:11 すべての人を愛するが、すべての人から迫害されている。5:12 知られていないが、有罪とされており、殺されるが、生かされる。5:13 貧しいが、多くの人を富ませる。すべてのものに不足してはいるが、すべてのものに有り余っている。5:14 そしりをうけるが、そのそしりの中で栄誉を与えられる。中傷されるが、正しいとされる。5:15 罵られながら、(相手を)祝福する。……6:1 簡単に言



うならば、キリスト者がこの世におけるのは、まさに魂が身体におけるのと同じである。……6:3 魂は身体に住みながら、身体に属してはいないが、キリスト者も世に住みながら、世に属していない。6:4 魂は目に見えないものでありながら、目に見える身体の中に閉じこめられている。……6:5 肉は、悦楽にふけることを〔魂によって〕妨げられるがゆえに、魂を憎み、何ら不正な仕打ちをうけないのにそれ〔魂〕に戦いをしかけるが、世は、キリスト者が悦楽に抵抗するがゆえに、何一つ不正な仕打ちをうけないのに、彼らを憎む。6:6 魂は（自分を）憎む肉と肢体とを愛するが、キリスト者も（自分たちを）憎むものを愛する。6:7 魂は身体に閉じこめられていながら、身体をしっかり保持しているが、キリスト者も牢獄に拘留されるようにこの世に拘留されているが、彼ら自身はこの世をしっかり保持している。」魂の健全さが身体を含めた人間存在全体の健全さを保持するように、キリスト者の存在もこの世界を健全に保持するのに寄与すると語ります。

この点で**創造的少数者**——例え

ばマザー・テレサや M.L.キング——の**存在の意義**は大きいのです。この世界に歩調を合わせず迫害を受けるけれども、彼らの主人であるイエスと同様に、イエスの弟子たちは彼らを迫害する世界のために自分たちの生活を生きるのです。

M.L.キングは自分を取り巻くキリスト教を批判して、キリスト教徒は多数派の意見を示す温度計のようなもの〔多数派の意見を代表するだけのもの〕であって、社会の温度を変え、調節するサーモスタットになっていない（『汝の敵を愛せよ』26頁）と語ります。キングはキリスト者が塩気を失っていると言いたいのでしょうか。「地の塩」に「**塩気がなくなれば**」どうなるのでしょうか。「塩に塩気がなくなる」という表現は、直訳すると「塩が愚かになる」という表現です。人を「愚かにする」とか、人が「愚かである」という意味の言葉（**μωραίνω**）が使われています（II コリ 1:20, ロマ 1:22）。



さしずめ「**塩がバカになる**」と訳せるところです。この表現は、愚かな弟子や愚かなイスラエルと引っかけた表現になっているのです。塩が塩気をなくすのは、不純物が混じる——不純になる——ことによるのです。〔死海沿岸やシリアの荒地でとれる岩塩は不純物を多く含む。〕つまり他の要素(マグネシウム、カルシウムなどの化合物)と混じり合うことによって、塩はその機能を失うのです。

先週「幸いの教え」を読んだときに「心の清さ」(マタ5:8)について学びました。キリスト者の「地の塩」としての塩気が戻ってくるのは、「心の清さ」が戻ってくるのと同じなのです。「心の清さ」は単に「不純な思い」(例えば、性的な空想)を避けるというようなことではなく、唯一の神を信じる信仰にふさわしい神へのひたむきな心のあり方や、献身を指しています。「一すじの心」とか「一つ心」「一心」という表現が当たっています〔英訳「分かれていない心」undivided heart(詩86:11)〕。ですから心の清さの反対は、「二心」でした。ヤコブ書4章8節。
「4:8 神に近づきなさい。そうす

れば、神は近づいてくださいます。罪人たち、手を清めなさい。二心の者たち、心を清めなさい」(口語訳、新改訳「二心」、新共同訳「心の定まらない」)。清さは神に近づくところから、塩気も神に近づくところから回復されるのです。

さてもう一つの宣言は「世の光」に関する宣言です。14-16節。
5:14 あなたがたは世の光である。山の上にある町は、隠れることができない。5:15 また、ともし火をともして升の下に置く者はいない。燭台の上に置く。そうすれば、家の中のものすべてを照らすのである。5:16 そのように、あなたがたの光を人々の前に輝かしなさい。人々が、あなたがたの立派な行いを見て、あなたがたの天の父をあがめるようになるためである。」



「光」の働きとは何でしょうか。「世の光」、「山の上の町」、「ともし火」は「光」の働きの説明として用いられています。第1に光の働きとは、「照らすこと」です。物があるがまま見えるように照らすことです。同時に第2の働きと

は、「見られること」です。光とは、見られることが必然的で避けることができない存在なのです。

「世の光」としてのキリスト者の働きとは何でしょう。「世の光」は、世界を照らす存在です。それは希望の光なのです。暗い世界を



照らす光についてイザヤ書はこう語ります。

9章1節

〔口語訳・新改訳9:2〕。「9:1 闇の中を歩む民は、大いなる光を見／死の陰の地に住む者の上に、光が輝いた。」主イエスの登場を預言するイザヤの言葉です。光としてやって来た主イエスは「**あなたがたの光を人々の前に輝かしなさい**」と語ります。神を指し示す光です。この隠喩は、教会を灯を点されたもの、つまり光を受けたものとして描いていることに注意しましょう。塩が自らの塩気を生み出すことがないのと同様に、光も光自体を生み出すことはできないのです。この光の源は神です。「**ともし火**」は自分**自身のために灯を点されたのではなく、世界を照ら**

すために灯を点されたのです。

主イエスは光(立派な行い)を人々の前に輝かせて、見られるようにしなさいと言われます。しかし他方、別の箇所では、立派な行いを人に見せないようにしなさいと命じます。例えば、5章16節。

5:16 そのように、あなたがたの光を人々の前に輝かしなさい。人々が、あなたがたの立派な行いを見て、あなたがたの天の父をあがめるようになるためである。」

それに対して6章1－18節。1

節だけ見ておきましょう。「6:1

見てもらおうとして、人の前で善行をしないように注意しなさい。

さもないと、あなたがたの天の父のもとで報いをいただけないことになる。」この〈見られること〉

と〈隠すこと〉の緊張関係はどう説明すればよいでしょうか。まず、

マタイ福音書にはこのような緊張が数多く存在します（例えば、5:4と9:15、5:9と10:34、6:34と25:1-13、7:12と13:38、9:13と10:41、

16:6と23:3）。このような緊張は

「聖書における矛盾」を示す実例として、攻撃の対象とされるべき

ではありません。またそれらの緊張は、バランスのとれた一貫性へ

とあまりにも安易に調和させられるべきでもありません。これは、箴言に見られるような聖書の知恵一般の性質でもあるのです。例えば、箴言 26 章 4 節で「26:4 愚か者にはその無知にふさわしい答えをするな、あなたが彼に似た者とならぬために」と言っておいて、次の 5 節では。「26:5 愚か者にはその無知にふさわしい答えをせよ。彼が自分を賢者だと思い込まぬために。」「飛ぶ前に周りを見よ」と言っておいて、「躊躇するものは失う」と語ります。「愚か者は天使がためらうところに突き進む」と警告しておいて、しかし「危険に顔を背けずに全力で前進せよ」と続けます。福音書は〈ハラハー〉つまり生活規則として意図されたのではなく、言葉に矛盾をはらませることによって、言葉に動きを与え、人が形式的な言葉の

枠(生活規則)を離れて(脱して)、自ら想像力を働かせて個人的に決断する責任感覚を刺激することを意図しているのです。主イエスの言葉のもつ荒削りな鋭さは、他の聖書の教えと、あるいは主イエスの言葉同士でさえ相互に一貫性を持たせるために、あまりにも性急に、その矛盾を削り取って丸くされてはならないのです。神の国を語る言葉には、ある種の言葉の野生性が宿ります (NIB183)。そしてその野生性は人々の慣れきった(慣習的)現状を打破する言葉になるのです——その野生性は調和化され平板な生活規則として飼い慣らされる時に失われるのです。

今日の箇所には「塩」と「光」とそして「山の上の町」といういう 3 つの比喻が出てきました。これらの 3 つの比喻は何を意味しているのでしょうか。まとめましょう。これらの比喻は、1 つ目に潜在化する働き(目に見えない働き)を意味しています。塩は見えない働きをします。溶けて浸透することによって「地味ながら大きな働き」をします。与えられた状況の中に入って行き、真にとけ込むことによって塩は働くのです。



山上の垂訓教会(イスラエル)

2 つ目は、**顕在化**する働き（目に見える働き）です。光がまさにそのような働きをするのです。内なる部屋における虚飾のない祈りの力によって生きる教会は(6:6)、自分を世界に対して隠す内向的な秘密の結社ではなく、山の上におかれた町であり、その**真の生活の姿は隠すことができません**。見える教会。見栄を張る教会ではありません。たとえ見栄があったとしても、それはキリストへの服従によって克服されていくのです。

塩と光に関するこれらの宣言は、幸いの教えと連続しています。「…は幸いである」と宣言されたように、マタイの読者／弟子たちは、塩にそして光になるようにより懸命に努力するように求められているのではなく、イエスに従う者として、そのままでこの世界に対して「塩であり、光である」と宣言されているのです。この聖書の言葉は読者に、もっと自分の力を発揮するように命じているわけではありません。主イエスが語られた「わたしがあなた方を人間をとる漁師にしよう」という言葉を信じ、主イエスとともに歩むとき、塩と光の働きはとどめようのない

新しい現実になるのです。

主イエスのこれらの言葉を丁寧にまた慎重にまとめているマタイは、この点に関しても優れた教会の教師です。マタイは、主イエスのメッセージの新しさや急進性を保持すると同時に、毎日の生活の現実の中に主イエスの教えをいかに活かしていくかということに实际的な指導を与えています。マタイは、エッセイストではありません。エッセイを書くのではなく、主イエスの教えを生活（ライフスタイルに）することを目指しているのです。これは、山上の説教の次の「律法」をあつかう「教え」の部分（5:17-48）でより明確で深遠な思想になってきます。

主イエスは言われました。「あなた方は地の塩であり、世の光です。」塩としての、また光としての新しい1週間の歩みのために祈りましょう。

2020.2.9 日本基督教団千歳丘教会礼拝

